

者

者の古い形は、𩇛で、容器からはみ出るほど“ものがひどく、たくさんある”ことを表わした字です。今は、“もの”という意味と、“ひどくたくさん”という意味と二つに分かれて使われています。つまり、単独に使われる時は“もの”で、部首として使われる時は“たくさん”という意味に使われるのです。音は部首としては、sya→syo→tyo→toと変化して使われています。

煮は、火が燃える意味の灬と、“ひどい”という意味の者との会意形声字で、“どんどんと火を燃やす”という意味で“にる”ことを表わしたものです。「煮沸」は煮て沸かすという意味のことばです。音は者。

奢は、“ひどい”という意味の者と威張る意味の大との会意形声字です。大は、手足を広げて力んでいる形ですから、“威張る”という意味があります。それで、「あいつ、大きい顔をしていやがる」などというわけです。“ひどく威張る”“度を越して見えを張る”という意味の字です。音は者です。豪奢。奢侈。

暑は、日(太陽)と、“ひどい”という意味の者との会意形声字です。“太陽がひどく照りつける”という意味で、“あつい”ことを表わし

たものです。同じ“あつい”の中でも、湯のあついのは、火のしるしのついた「熱」です。暑い 寒い。熱い 冷たい。音は者です。酷暑。残暑。避暑。

諸は、“ひどく言葉が多い”という意味の字ですが、今では単に“多い”という意味に使われて、“もろもろ”などと読まれています。「諸国」は“もろもろの国”“多くの国”ということです。諸君。諸侯。諸将。音は者です。

著は、“ひどく草がしげる”という意味の字ですが、これも今は草に関係なく、物事の“ひどい”“いちじるしい”という意味に使われています。また、“目立つ”“表面にあらわれる”ことから“あらわす(本を書く)”という意味にも使われます。顕著。著明。著名。著述。

署は、網の意味の罟と、“たくさん”の意味の者との会意形声字です。“網の目のようにこまかく手分けする”という意味の字です。“手分けする”“配置する”という意味に使います。部署。署理。また、“役所”の意味にも使います。警察署(仕事を細かく手分けして、しかも網の目をはったように緊密な連繋を取って犯人を捜査

する役所には署は打ってつけの字です)。

薯や**諸**は、いもがひと所にたくさん集まってできるところから、署(諸)と~~𦵏~~とで表わしたものでしょう。甘薯。甘諸(甘いいもという意味の字です。さつまいもというのは、わが国における原産地が薩摩の国、今の鹿児島県だったからです)。

緒は、同音の初^{ショ}の意味の者と糸との合字です。“糸の初”つまり“糸口^{いとぐち}”を表わした字です。音は初^{ショ}ですが、誤って著^{チョ}と読まれることが多いようです。端緒。緒言。緒論。由緒(血すじ(統)の意味)。情緒(喜怒哀楽の糸口という意味のことば。今ではほとんどジョウチョと読まれています)。

渚は、緒^{ショ}(初)と同じ意味の者と水との合字で、“水のいとぐち”という意味の字です。陸地から水にかわる“波うちぎわ”つまり“なぎさ”のことです。水^{みず}ぎわ→みぎわ。

曙は、緒^{ショ}(初)の意味の署と日との合字で“太陽の糸口”という意味の字です。“夜明け”を表わしています。太陽が地平線に姿を現わしかけた状態が曙です。この字は“あけぼの”と訓じられています。これは“ほのぼのとあけ初める”という意味のことばです。

曙光は、“あけぼのの日の光”ということですが、今までの暗黒を破って、光明に満ちた世界になることを約束していますので、“良いことの起りかかる兆(きざし)”という意味によく使われます。

都は“ひどくたくさん”という意味の者と卩との会意形声字です。卩は、“へん”の場合は崖ですが、“つくり”の場合は、邑^{まち}の意味になります。卩は邑の省略変形したものです。都は、“たくさんの邑^{まち}を含んだ大きな町”という意味で“その国の主権者の住むみやこ”を表わしたものです。単に“大きな町”の意味にも使われます。音は者^{ユウ}です。首都。国都。都市。都会。都邑。

箸は、者の本義に竹を加えた会意形声字で、“容器に盛られた物をつまむ竹ばし”という意味の字です。昔の箸は、一本の竹を湾曲させて、“”のようにし、今のピンセットのようにして物をつまみました。その様子が、鳥のえさをついばむ口ばしに似ているので“はし”と呼んだものです。昔は、口ばしのことも、単に“はし”と呼んでいました。